

千葉に貝塚ができたころー縄文海進初期の海と資源利用ー

西野雅人（千葉市埋蔵文化財調査センター）

はじめにー取掛西貝塚の衝撃ー

平成20年7月5日、関係者で取掛西貝塚第5次調査を見学させていただいた日のことは忘れられません。早期前葉の立派な竪穴住居跡、分厚くびっしり詰まった貝層、多量の獣骨や見なれない土器などの光景は、わが目を疑うほどの衝撃でした。多くの面からみて日本に一つしかないきわめて重要な遺跡であることは、総括報告書にまとめられた通りです。長期にわたる発掘調査と分析・研究の成果をまとめ上げ、史跡指定が実現したことはとてもすばらしく、関係者の皆様と協力してくださっている市民の皆様に賛辞を送ります。新駅や区画整理の計画が進む現状からみれば奇跡ともいえるできごとだと思います。

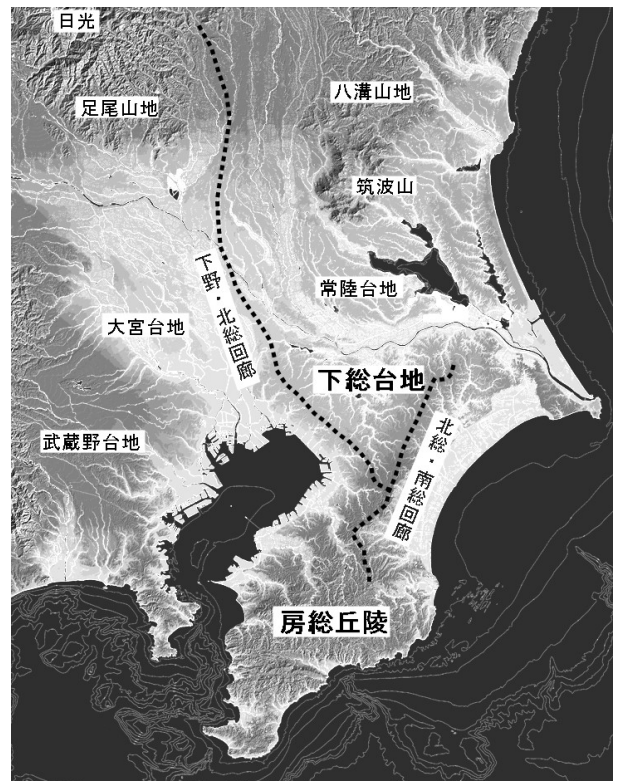
依頼を受けたのは、千葉県における縄文時代早期の古海況と貝塚形成であり、その部分を中心にお話しますが、『取掛西貝塚を考える』という大テーマに沿って、取掛西貝塚の分析・研究の成果に対する考えにも少しだけ踏み込んでみます。

1 二つの内海と下総台地

旧石器時代末から縄文時代前半期にかけて房総の海と大地ができ、大きく変貌していきました。海域の変化については野内さんが詳しく解説してくださると思うので、わたしは下総台地の様相を取り上げて、取掛西貝塚が成立した背景や、なぜこの場所を選んだのかを考える手がかりを探ってみたいと思います。

（1）平坦な台地と二つの回廊

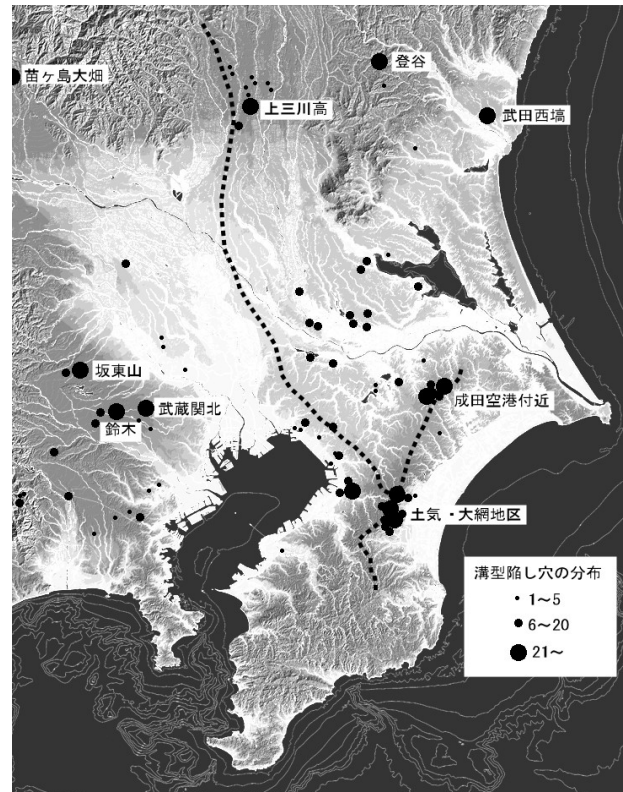
房総半島の地形は概ね下総台地、房総丘陵、沖積低地からなり、下総台地は国内最大の平坦地です。台地には東京湾・古鬼怒湾・太平洋の3水系の河川が流れており、水系を分ける稜線＝分水嶺は、丘陵と台地を結ぶ二つの自然道（回廊）を形成していました。「下野・北総回廊」は日光・足尾山地付近から千葉市土気地区に、^{ほくそうなんそうかいろう}「北総ー南総回廊」は房総丘陵から北総台地につながる道として各時代に認識・利用され、哺乳類の移動ルートにもなっていたと考えられます。徳川幕府による利根川東遷事業による「下野ー北総回廊」の切断と、空前絶後の大規模^{こがねまきおしがり}（小金牧御鹿狩）によって激減するまで下総台地は野生動物の宝庫＝狩猟好適地でした。



第1図 関東・房総半島の地形と二つの回廊

(2) 狩猟好適地

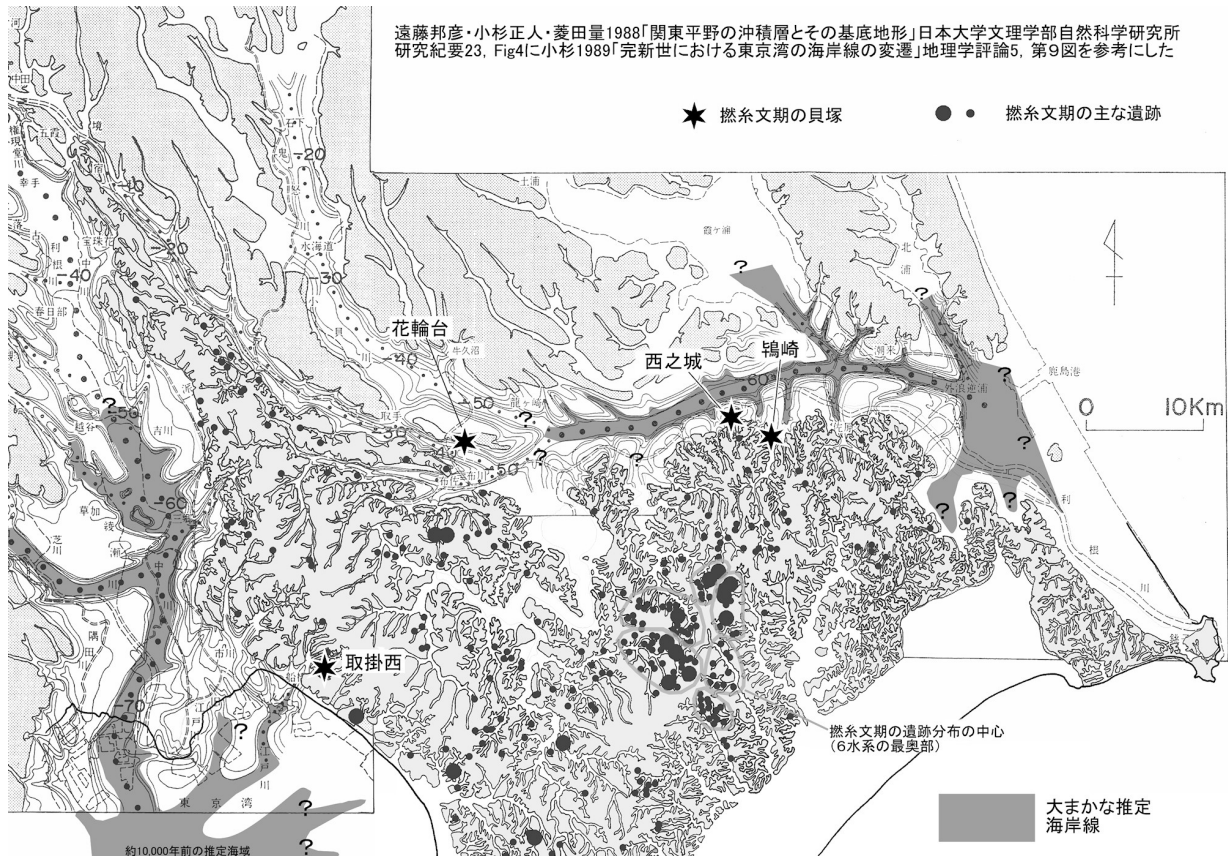
関東と東北では縄文時代の「^{おとしあな}陥し穴」とされる土坑が多数発掘されています。大まかに「楕円型」「溝型」に区分でき、溝型陥し穴はシカ猟専用と考えられています。盛行した年代は縄文草創期から早期前葉とみられ、中期後葉から後期初頭にも使われました。関東では下総台地が全体の半数以上を占めています。分布を見ると(第2図)、シカが標高移動する山地と台地の間、下総台地内部の尾根が狭まった部分、二つの回廊の結節点などに多く、こうした場所を中心に陥し穴猟が行われたと考えられます。とくに集中する土気・大網地区は、3水系の結節点、房総丘陵の北端、二つの回廊の交差点という特別な場所です。次に多いのは旧石器～早期前葉の遺跡が集中する成田空港付近です。この場所も古鬼怒湾と太平洋につながる6つの谷頭が集まる特異な場所であり、縄文早期まで狩猟好適地であったようです。



第2図 溝型陥し穴の分布

(3) 取掛西遺跡付近の海域推定

第3図は、沖積層基底図の等深線をもとに約1万年前の推定海域を示したものです。海がどこまで及んでいたのかは水系ごとにボーリング調査等によって検証する必要があります、この図はおおまかなものです。



第3図 沖積層基底図と早期前葉の集落・貝塚分布

この図でわかるのは、下総台地は現在より海側に大きく張り出していたことと、海老川の水系のうちもっとも深く長い谷が取掛西貝塚に向かって伸びていることです。総括報告書ではボーリング調査の成果を使って詳細な分析が行われているので、口頭発表では触れてみたいと思います。いずれにしても、この谷の奥に形成された河口汽水域がヤマトシジミの漁場となったのでしょう。

2 縄文時代前半期の様相

(1) 縄文らしい文化の誕生

縄文時代は、約1万6千年前、最古の縄文土器の出現からはじまります。ただし、土器の利用が一般化するまでには長い時間を要しており、旧石器時代から引き続き出土遺物のほとんどが狩猟用石器とその製作に関わるものです。遺跡分布も変化しません。こうした点から、約1万2千年前までの縄文草創期を縄文時代に含めないほうが良いという研究者もいます。土鍋を多用する縄文らしい文化は、約1万年前に誕生します。取掛西貝塚はこのことを象徴する遺跡の一つといえます。

(2) 千葉らしさの誕生

加曽利貝塚や高根木戸貝塚、海老ヶ作貝塚など、縄文中期なかごろに出現した東京湾東岸の大型貝塚は、千葉の海・里のめぐみを活かして通年定住型の生活をはじめたムラのあとです。稲作農耕開始＝定住という以前の定説より3,000年近くも前に定住が実現していたのです。ただし、その成立基盤となっためぐみ＝食材を見つけて利用技術を磨いたのは、大型貝塚以前の人たちです。

最初に千葉に住み始めた人たちは、動物を追いかけて関東広域を遊動^{ゆうどう}しつつ生活したハンターとその家族でした。その後、定住に至るまでの期間はきわめて長く、その間に、自然環境の大きな変化とライフスタイルの大転換がありました。縄文時代前半は、自然環境の劇的な変化のなかで、有用な食材を探索・活用して貝塚文化や「千葉らしさ」が生まれた時期でした。

取掛西貝塚は、こうした動きの出発点となった遺跡であり、この時期としては資源利用を詳細に検討できる県内唯一の存在です。ほぼ肉食というシンプルな資源利用から多様な資源利用に大きな一歩を踏み出したこと、千葉の食材を活かした文化であることは疑いありません。ただし、千葉らしくない要素も併せもつように感じます。縄文草創期までの広域遊動をした人々が繰り返し立ち寄ったのか、それとも、かなり千葉に定着した地域内遊動した人々のムラであったのか。このあたりが今後注目されるところです。

(3) 貝塚出現の意味

早期前葉の出現期の貝塚は、古鬼怒湾水系に2か所（神崎町西の城貝塚^{にしのじょう}・香取市鵜崎貝塚^{ときざき}）、東京湾水系に1か所（取掛西貝塚）が知られています。その存在は、資源利用の多様化の先駆的な事例として評価できますが、貝塚の形成は広がることはありませんでした。取掛西貝塚でも、比較的活発に水産資源を利用したのは一時期のみで、前後の時期には利用されていません。

この時期の遺跡分布は、古鬼怒湾水系と九十九里水系の分水嶺（6つの谷頭が集まる成田・芝山付近＝成田空港周辺）に集中し、周囲への広がりをもっています（第4図A）。早期中葉にはやや沿岸方向にシフトするものの小さな変化といえます（第4図B）。この付近は、旧石器時代から縄文早期中葉まで、きわめて長い間土地利用の中心だったのです。圧倒的な求心力は狩猟好適地であることに由来するとみてよいでしょう。こうしてみると、貝塚出現は、水産資源の利用、資源利用の多様化の萌芽と評価はできても、一般化はしなかったとみるべきであって、例えば定住化の証拠とするのは拡大解釈あるいは誤解というべきです。漁撈活動は早期前葉にはじまるが、にわかには広まることはなく、狩猟に強く偏った生業・生活が続いたのです。



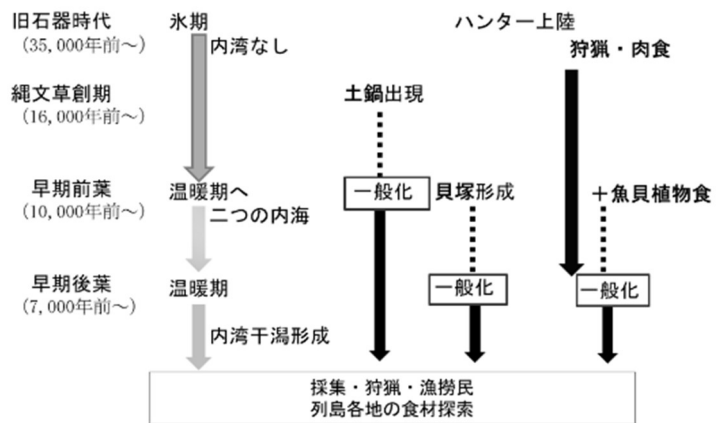
(4) ライフスタイルの大転換

早期後葉には内陸から沿岸まで、下総台地の広域に分布するようになります(第4図C)。炉穴と呼ばれる屋外調理施設と遺物集積が広域に点在して遺跡群を形成することが特徴です。また、小規模な貝層を形成する遺跡が急増し、貝類の利用が一般化したことがわかります。貝層は小規模で貝殻以外が混じらないのが一般的で魚類の利用は低調です。しかし、移動と回帰を繰り返して炉穴が夥しく重複する一部の集落群では比較的大きな貝層を形成し、貝層の一部には魚類を比較的豊富に含む例がみられます。船橋市飛ノ台貝塚と市原市天神台遺跡が代表的な例です。

この時期は概ね縄文海進のピークにあたり、遺跡分布の変化は、内湾域が拡大して湾奥干潟が良好な漁場となったことが背景にあったことは疑いありません。また、磨石類・石皿、小形打製石斧・礫石斧等の増加はデンプン質食材の利用の一般化を示しています。土器の使用開始から9,000年ほど遅れて、殻の除去や灰汁抜き等のさまざまな食糧化技術の発達を経て、このころ顕在化していったものと考えられます。

貝類と植物質食材の利用の活発化が同時期に起こった背景には、温暖化に伴う落葉広葉樹中心の森林と、縄文海進による内海干潟という生産性が高く利用しやすい食資源の増加という環境の変化がありました。いっぽうで、この時期は狩猟も引き続き盛んに行われていたと考えられます。地域に定着しつつも、地域内で頻繁に移動する生活＝地域内遊動であったとみることができ、居住様式は定住型ではありません。

このライフスタイルの大転換をどう表現すべきかずっと悩んでいたのですが、肉食から雑食への変化、すなわち「雑食化」とするのがよいだろうと考えるようになりました。これをきっかけとして、全国で食材探索・獲得技術開発と情報の共有が進みました。早期後葉から前期は各地で有用な食材を探し、利用を模索した時代とみることで、新鮮な食材を活かした多様な食文化が各地で花開いたのです。第5図はここまでの変化を模式的に示したものです。



第5図 変化の模式図

3 取掛西貝塚の発掘成果

(1) 集落と貝層形成の時期

総括報告書の土器の分類と集落の時期区分をまとめてみると右のようになります。住居跡が見つかっているのは早期前葉・撚糸文土器の後半と、前期前葉から中葉で、早期ではⅡ期～Ⅳ期の3時期に区分されています。このうちⅢ期には比較的活発に水産資源を利用していますが、前後の時期には全く利用されていません。単なる時期的な流行ではないのかもしれませんが、関東広域の土器が使われたⅢ期には利用され、おもに茨城・栃木に分布する天矢場式新段階の土器だけになるⅣ期には利用されなかったという、生産様式の異なる集団の影響による可能性も検討すべきでしょう。

(2) 貝類の利用

出現期の貝塚として挙げた3つの貝塚と、早期中葉の香取市城ノ台貝塚の貝の種類を見ると、西の城貝塚と取掛西貝塚は汽水産のヤマトシジミがほとんどです。西の城貝塚より少し後の鵜崎貝塚もヤマトシジミがほとんどですが、海の貝（ハマグリ・マガキ）が少し混じっており、城ノ台貝塚ではハマグリ・マガキが主体になっています。このように、貝類の利用はヤマトシジミからはじまりました。ところが、ヤマトシジミはその後、前期・中期とほとんど利用されなくなります。

ヤマトシジミは、現代では淡水域も含めた内水面における最重要種です。古鬼怒湾水系の印旛沼・手賀沼・

時期	土器大別	集落	土器細別	細別名	住居	貝層
早期前	I群	I期	1類	井草		
			2類	夏島		
		Ⅱ期	4・5類	稲荷原・花輪台Ⅰ	13	
		Ⅲ期	11・13類	大浦山Ⅰ・東山・平坂 (花輪台Ⅱ・天矢場・古)	11	○汽水
		Ⅳ期	15類	天矢場・新	6	
早期中	Ⅱ群	×	—			
早期後	Ⅲ群	×	—			
前期初	Ⅳ群	×	1類			
前期前	V期		2・3類	二ツ木・関山	7	○海水
前期中	Ⅵ期		4類	黒浜	11	○海水

長沼・現利根川における資源量は、縄文時代以降どの時代も相当なものであったはずですが、縄文後晩期以外にはごくわずかししか利用されていません。その理由についてわたしは次のように考えています。縄文時代早期後葉以降海産貝類の利用が盛行したのは、鍋料理に塩分やうま味を加える食材であったから。哺乳類の肉が主食であった早期前葉や、製塩が盛行した後期中葉から晩期前半にヤマトシジミが利用されたのは、他の食材によって塩分を補うことができたからというものです。

なお、ヤマトシジミは貝殻成長線分析による採取季節の推定が可能です。季節が偏るのか否かは当遺跡全体の性格を知る上でも重要なので、将来の分析に期待がかかります。

(3) 植物資源の利用

取掛西貝塚では、早期前葉の炭化種実と土器圧痕の分析が行われ、クリ、コナラ、シイ、クルミなどの堅果類やマメ類（ダイズ・アズキ類）の利用が判明したことはきわめて大きなことです。約1万年前に落葉広葉樹林がすでに存在し、デンプン質食材の利用がはじまっていたことが明らかになったからです。そのほか、漿果類のエノキ、キハダ、ミズキ、マタタビ、ニワトコなどの果実の利用も示唆されています。

(4) 身を飾る風習

身を飾る風習が縄文時代当初から存在したことは、草創期前半の愛媛県上黒岩岩陰遺跡、草創期末の長野県栃原岩陰遺跡の出土資料によって知られています。上黒岩岩陰遺跡では、タカラガイ・イモガイ・ツノガイの海産貝類3種とエイ・サメ類の椎骨という縄文時代を通じて使われる素材が揃っています。栃原岩陰遺跡では、これにクマとサメの歯牙が加わります。素材自体がもつ特異な形状＝自然の造形が特別視され、形状を活かしたものを身に着けることが身体装飾の起源だったのです。素材の形状を活かしたもののほかに、骨や角の板状・棒状素材を磨いて作った髪針も揃っています。白い色や光沢、管玉・白玉・貝小玉・牙玉・髪針などの形状という美のトレンドもここから始まりました。取掛西貝塚でもこれらが揃っており、上黒岩―栃原の系譜を引き、さらに多様化しています。大量のツノガイ製管玉・白玉とその未成品は、最古の製作遺跡の発見と、他所への流通を意味しています。早期後葉の市原市天神台遺跡で知られていましたが、一気に3,000年ほどさかのぼるものです。

さいごに

貝塚出現は多様な資源利用の端緒だがその後継せず、ライフスタイルの大きな変化は早期後葉に起きたと説明しました。取掛西貝塚はこうした変遷のなかで特異な存在といえ、時代を先取りした感があります。今後新たな研究の積み重ねによって、さらに魅力を増していくことと思います。時期的に直接比較可能な遺跡が出てくる可能性は低いので、同時期では関東あるいは全国的な視野での比較検討が必要です。千葉のなかでは、早期後葉との比較検討が重要になり、その意味で飛ノ台貝塚の存在が大きいといえます。資源利用の内容を詳細に比較・検討することで、なにが変化したかが見えてくると思います。船橋市には早期後葉から後期中葉に至るまでの貝塚資料が揃っています。1万年前の詳細なデータをもっているのは船橋市のみであり、ほぼ縄文時代全体を通じた変化を研究することができる素晴らしい地域といえます。

東京湾東岸の大型貝塚群は、約5,000年前の40数か所の大型貝塚から始まりましたが、わたしはそれを作ったのは関東広域の人たちであったと考えています。取掛西貝塚にも同じような傾向が認められるように思います。だれが、なぜここを選び、なぜ受け継がれなかったのか。初めて見学したときの衝撃から続く謎の解明に興味は尽きません。結論を急がず、さまざまな意見が交わされることで、取掛西貝塚、あるいは船橋市の縄文遺跡群は輝きを増していくことと思います。